

# 良き羊飼いいイエス

ヨハネによる福音書 10 : 11 - 16



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年4月21日

復活節第4主日

聖光教会にて

**「わたしは良い羊飼いである」ヨハネ 10:11、14**

イエスは今日の福音書の中で2回も言われました。

けれどもこれは大勢の人の前で大声で宣言するように言われたのではなく、悩みを抱えた人たちの心に届くようにそっと呼びかけられたのではないのでしょうか。

**「わたしは良い羊飼いである」**

このように言われるイエスは、この世の現実を見ておられました。マタイ福音書はこのように伝えています。

**「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」9:35-36**

イエスは、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれた人々を見て、自分のはらわたが苦しむほどに深い憐れみを起こされました。

その当時、政治的にはローマ帝国の支配下であり、信仰的に羊飼いの役割を果たすべき者と言え、大祭司、長老、律法学者たちのはずでした。しかし彼らは自分の力と権威を誇示するばかりで、人々を逆に神さまから遠ざけている。これはイエスにとって深い悲しみであり、怒りでした。

ところで「羊を飼う」というのは聖書の民イスラエルの最初

からの伝統です。先祖アブラハムが羊飼、モーセも羊飼、そして後のダビデ王は元々ベツレヘムの羊飼でした。そのダビデが歌ったとされる「主はわが牧者」という詩編第 23 編の言葉は多くの方がご存じでしょう。神の民イスラエルにあっては、本来の羊飼いは神さまです。

牧者である神さまは、人々を守り導き養う羊飼いの役割を、イスラエルの指導者に委ねておられました。具体的に言えば、祭司、預言者、そして王です。現実にも力と権限を持っているのは王ですから、イスラエルの王は民を守り養う責任があったのです。ところが現実にはほとんどまったく正反対でした。

今日の旧約聖書・エゼキエル書で神はこう言われていました。

「お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいやさず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、苛酷に群れを支配した。」 34:4

神さまはイスラエルの羊飼いたるべき指導者たち、王たちが民を養い守るどころか、「苛酷に群れを支配した」と憤り、みずから民の羊飼いとなってご自分の群れを探し出して世話をすると宣言されました（エゼキエル 34:12）。

こうした聖書の言葉はイエスの胸に響いていたでしょう。みずから羊飼いとなって人々を守り導こうとされる神の熱い思い

が、イエスの中に燃えていたのではないのでしょうか。

そしてある時、イエスははっきりと確信されるようになった。神が自分をとおして働かれる。人々を守り導き養う羊飼いの役割を、自分が引き受けなければならない。神がそれを自分に託しておられる。弱り果てた人々への愛が、寄る辺なき人々への思いが、イエスのはらわたに燃えています。

### 「わたしは良い羊飼いである」

ところで、この言葉が語られているのはヨハネ福音書第 10 章ですが、その前後に羊飼いとしてのイエスの姿を見つけることはできないのでしょうか。まず9章を開いてみますと、そこに出てくるのは生まれつき目が見えなかった人です。その人とイエスの出会いは、弟子たちのこういう言葉から始まります。

「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」9:2

それに対してイエスは「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない**」(9:3)とされました。悪いことをしたからその報いでこうなる、という考えをイエスは断固として否定された。こうした因果応報の考えは、重荷を抱えた人をさらに差別の目と言葉で苦しめる悪しき考え方です。それをイエスは完全に否定した上で、「**神の業がこの人に現れる**」(9:3)とされました。この目の見えない人に、神の業が現れる。

この人はイエスが言われたとおりにシロアムの池に行って目を洗い、そこで見えるようになって帰って来ました。ところがそれが安息日だったというので、彼はファリサイ派から厳しい追及を受けることになります。どうして目が見えるようになったのか。それをしたのはだれか。

彼は自分の身を守るための弁明もできたはずなのですが、目を開いてくれたイエスを尊敬する思いから、「あの方は預言者だ」「神から来られた方だ」とイエスを擁護する発言を繰り返しました。その結果、「お前はまったく罪の中に生まれてくせに」と罵倒され、外に追い出されてしまいました。外に追い出されたというのは、ただ尋問の場所から出されたというだけではなく、会堂から、つまり村の共同体から追放されてしまったということだったでしょう。

その間、イエスは彼のことを心配して祈っておられたに違いありません。彼が追放されると聞かれたイエスは彼を探し、見つけられました。この人とイエスの間には深く心が通い、彼はイエスを信じる人となりました。

イエスはこの人の羊飼いとなられた。このイエスとの出会いの中で、彼は本来の自分を取り戻し、しっかりと真実を求めて生きる人となったのです。

今度は次の11章はどうでしょうか。ヨハネ福音書11章には、エルサレムの近く、ベタニアのマルタ、マリア、ラザロが登場

します。ラザロが重い病で死の床に伏していることがイエスに伝えられました。イエスはこのとき、遠い所におられたのです。しばらくしてイエスはラザロの所に行くと言われました。弟子たちは反対しました。なぜならついこの前、そのあたりでイエスは石で打ち殺されそうになった。危険な場所なのです。しかしイエスは、「ラザロを起こしに行く」と言って出発されました。

しかしベタニアに着いたとき、ラザロはすでに死んで墓に葬られていました。出迎えた姉妹のマルタもマリアも、「主よ、もしここにいてくださいましたなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と嘆きます。墓に行く途中、イエスは涙を流されます（11:35）。それを見た人たちは言いました。「どんなにラザロを愛しておられたことか」。

イエスは墓の前で「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれました。すると死んでいたラザロは、手と足を布で巻かれたまま出て来た、と記されています。

不思議な話なのですが、ここで大事にしたいのは、イエスが、ご自分の命を危険にさらしてまでラザロを起こすためにここに来られた、ということです。そして姉妹たちが嘆き、友人たちが泣いている中を墓に行かれたイエスは、ご自身も涙を流された。そして最後はラザロを復活させられた。ご自分の羊を探し求め、羊のために泣き、そして新しい命を与えられる。これが羊飼いのイエスです。

あの生まれつき目が見えなかった人にとっても、ラザロ、またその姉妹のマルタ、マリアにとっても良き羊飼いとなられたイエスは、わたしたちにとっても良き羊飼いとなられる。これを知ってほしいというのがヨハネ福音書の願いです。

イエスはこう言われました。

**「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」ヨハネ 10:14**

「自分の羊」と訳されていますが、原文は「エマ=わたしのもの」という言葉です。わたしはわたしのものを知っている。イエスはわたしたちを「わたしのもの」「大切な、愛してやまないわたしのもの」と言われます。この方はわたしたちを、わたしを、ご自分のものとして知っている、と言われます。わたしたちの願い、わたしたちの苦しみ、不安、病、負い目、わたしたちの祈り、わたしたちの抱えている困難な現実を知っていてくださる。それを深く心にとめていてくださる。そのわたしたちのために最善のことをしようとしていてくださる。それが良き羊飼いイエスです。

この方を知り、この方を信頼してついていくのがわたしたちです。

イエスは言われます。「わたしの羊もわたしを知っている。」

そうでしょうか。わたしたちはこの方を知っているでしょうか。知っているはずですが。しかしもっと知りたい。今日わたしたちは大事なことを知りました。この方がわたしたちを知っていてくださるということです。

イエスに知られ、イエスを知ることから、わたしたちの新しい歩みが始まります。イエスはわたしたちを導かれ、わたしたちはこの方について行きます。

祈りましょう。

主イエスさま、あなたがわたしたちの良い羊飼いとなってわたしたちを守り導き養ってください。あなたを信頼しあなたに従い行かせてください。弱った人、迷っている人の牧者となってください。わたしたちの教会の牧者となってください。わたしたちを愛し、わたしたちを守り生かすために命を捨てて復活されたあなたのみ名をほめたたえます。アーメン